『西南アジア研究』No. 59, 2003

『バーブル・ナーマ』チャガタイ語・ペルシア語諸写本に関する覚書

間　野　英　二

はじめに

15世紀末の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ，アフガニスタンを経て，16世紀前半のインドにムガル朝を開設したザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル（1483－1530年）はその母国語であるチャガタイ語（＝チャガタイ・テュルク語）を用いて優れた回想録『バーブル・ナーマ』を著した。しかし，この回想録のバーブル自筆の原本はすでに散逸し，いまは見ることが出来ない。そのため，筆者は，現在まで伝えられた4種のチャガタイ語写本と1種のペルシア語訳写本を用いてアラビア文字による校訂本を作成し，これを1995年に出版した［間野 1995］。しかし，この校訂本も，原本の完全な復元にはなおほど遠い。それ故，今後も，校訂本作成の際には利用できなかったが，その後に参照できた諸写本を利用して，地道にその補訂作業を重ねていく必要がある。本稿は，この補訂作業のために，『バーブル・ナーマ』のチャガタイ語およびペルシア語訳の諸写本について，筆者が現在所有する情報を一度整理しておこうとするものである。

すでに筆者が種々の機会に述べたように，『バーブル・ナーマ』のチャガタイ語写本に関する研究は，20世紀のはじめ，イギリスのAnnette Susannah Beveridge（1842－1929）によって強力に進められ，多くの優れた業績が残された[1)]。本稿もベヴァリッジの研究に負うところは多い。ただ，ベヴァリッジが見ることの出来なかった写本や十分に調査できなかった写本もある。本稿は，これらの写本をも含めた諸写本の現存状況，質的・量的な価値等に関する，現時点での最新の覚書である。このような覚書は，ベヴァリッジ以後，全く書かれていない。それ故，本稿が『バーブル・ナーマ』写本研究のための基礎的な資料の一つとして利用されれば望外の喜びである。

I　チャガタイ語写本

まずはじめに，現存するチャガタイ語写本をその所在地により分類して示し，その後に各

1）ベヴァリッジの研究については，間野2001の第6章「A. S. ベヴァリッジとハイダラーバード写本」および付編第4章「アンネット・スザンナ・ベヴァリッジ小伝」を参照願いたい。

写本についての解説を行う。

1 写本の所在地による分類

この分類では，最初に国名，ついで写本のある都市名を付した写本名，その後に所蔵機関を示す。

（1） インド

①ハイダラーバード本，Sālār Jang Museum 蔵

②カルカッタ本，Asiatic Society of Bengal 蔵

（2） 英国

③エディンバラ本，National Library of Scotland 蔵

④ロンドン本1，British Library 蔵

⑤ロンドン本2，British Library（India Office）蔵

⑥マンチェスター本，John Rylands Library 蔵

（3） イラン

⑦テヘラン本，Kitābkhāna-yi Salṭanatī 蔵

（4） ロシア

⑧サンクト・ペテルブルク本1，通称ケール本，Sankt-Peterburgskij Filial Instituta Vostokovedenija Rossijskoj Akademii Nauk 蔵

⑨サンクト・ペテルブルク本2，通称センコフスキー本，Sankt-Peterburgskij Filial Instituta Vostokovedenija Rossijskoj Akademii Nauk 蔵

⑩サンクト・ペテルブルク本3，Sankt-Peterburgskij Universitet 蔵

以上のように，チャガタイ語写本は，インドに2写本，英国に4写本，イランに1写本，ロシアに3写本の計10写本が現存する。バーブルは中央アジアの出身であるが，現在中央アジアに『バーブル・ナーマ』の校訂に利用できるチャガタイ語写本が存在することは知られていない。ただし将来の発見の可能性はなお残されていると云えるであろう。

2 各写本についての解説

以下に，各写本の所蔵機関，写本番号，それに量的，質的な特徴などについて述べる。

①ハイダラーバード本，Sālār Jang Museum 蔵，写本番号 Lughat-i Turki 21。

『バーブル・ナーマ』の現存する写本の中で，分量的に最も多くの部分を含み，質的にも優れた写本である。このため，1905年にベヴァリッジがその写真複製をロンドンで出版し[Beveridge 1905－1]，この複製本が，1995年に筆者の校訂本が出版されるまで，実に90年間に亘って『バーブル・ナーマ』研究のもっとも重要な基礎資料として利用されてきた。書写年代については，ベヴァリッジは紙の質から1700年頃と推定した。筆者は憶測に過ぎないが，それより早い17世紀の前半に作成されたのではないかと推定している。

重要な写本であるが，すでに近著でも述べたように［間野 2001：22－23］，この写本も，他の諸写本と同様，極めて大きな欠落部を含み，また文の脱落，誤字，脱字もかなり多い。それにも関わらず，分量が諸写本の中で最大であり，また，相対的ではあるが質的にも優れた写本であるため，筆者の校訂本でも，これを底本として使用した。

②カルカッタ本，Asiatic Society of Bengal 蔵，写本番号 D. No. 121。

筆者が未だ調査したことのない写本の一つである。この写本を検討したベヴァリッジによれば［Beveridge 1900: 462－465］，かつてインドの Mysore の Tippū Sulṭān の書庫に『バーブル・ナーマ』の一写本があったが，この写本はいつしか行方不明となった。この行方不明の写本と，この②のカルカッタ本が同一のものである可能性，つまり Asiatic Society of Bengal が Mysore 本を入手した可能性もあるとベヴァリッジは推測する。ベヴァリッジはまたカルカッタ本が Mysore 本そのものではなく，Mysore 本から写された質の悪い写本である可能性もあるとする。しかしこれらは全て推測であり，この写本の来歴は全く不明である。従って，書写年代も不明である。ただし，このカルカッタ本は少なくとも 1900 年にはカルカッタに存在し，ベヴァリッジが実際に利用した。またベヴァリッジによれば［Beveridge 1908：97］，この写本は質から見て校訂本作成のためには無価値の写本と云う。筆者もこのベヴァリッジの記述を信用して，この写本をこれまで調査しなかった。しかし，Asiatic Society of Bengal はなおカルカッタに現存すると云うから[2]，実地において調査する必要のある写本である。

③エディンバラ本，National Library of Scotland 蔵，写本番号 Adv. 18. 3. 18。

大英帝国のボンベイ知事であった M. Elphinstone が，1809 年，ペシャーワルで購入し，W. Erskine を通じて，1826 年，エディンバラの Advocates' Library（現 National Library of Scotland）に寄贈したものである。この写本は J. Leyden および W. Erskine が英訳本［Leyden, 1826］を出版した際に，不十分ながらも参照した重要な写本である。

書写年代について，ベヴァリッジはアクバル治世の初期，1556－67 年頃に書写されたものと推定した［Beveridge 1907：137；Beveridge 1922：xliii］。筆者は，'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān のペルシア語訳本が作成された 1589 年より以降のあまり遠からぬ時期，おそらく 17 世紀初頭に書写されたものと推定している［間野 2001：27］。

この写本の特徴をあげれば，すでにベヴァリッジが指摘しているように［Beveridge 1907：133］，まず第 1 は，この写本が，バーブルの長子フマーユーンが『バーブル・ナーマ』の本文に付した注（書き込み）の写しをも収録しているという点である。第 2 は，行間にチャガタイ語の語句の意味をペルシア語で説明した注が多く付けられているという点である。筆者はこれらの他に，第 3 の特徴として，この写本の内容が，他の写本とは異なり，'Abd

2）重松伸司氏の教示による。

al-Raḥīm Khān-i Khānān が 1589 年にアクバル帝に献呈したペルシア語訳本[3]の内容と一致する場合がきわめて多いという点を指摘したい。この一致についての詳細は，近著の記述［間野 2001：23－25］を参照願いたい。つまり，この写本は 'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān のペルシア語訳本と近い関係にある写本であると見なされる。このことは，この写本が，ムガル朝のアクバルの宮廷で，『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳作成のための底本として利用された，当時としては最良のチャガタイ語写本[4]の系統に属する，かなり優れた写本であることを意味している。

量的な面について云えば，①のハイダラーバード本を底本にして作られた筆者の校訂本の最終ページは 610 ページである。これに対し，このエディンバラ本は校訂本の 582 ページ半ば以降の記事を欠く。つまりこの写本は量的な面では①のハイダラーバード本などよりやや劣ることになる。

また，質的な面を見ると，記事の脱落が少なからず見られ，文章が不適当な位置に置かれている場合もある。さらに，約 5 行分，8 行分および 17 行分にも及ぶ全く不適当な文章の混入が文中に見られる場合もある。これらの点についての詳細はやはり近著の記述［間野 2001：26］を参照願いたい。

このように，この写本にも多くの欠点がある。それにも関わらず，この写本がペルシア語訳の底本として利用された 16 世紀の写本の系統に属する，かなり優れた写本であることは確実である。このため，校訂本作成の際には，底本であるハイダラーバード本の欠点を補うため大幅に利用した。

④ロンドン本 1，British Library 蔵，写本番号 Add. 26, 324［Rieu 1888：280－281］。

不完全な乱丁の著しい断片的な写本で，全体の葉数も 114 葉と少ない。書写年代は末尾のコロフォンによって 1039/ 1629－30 年と確定できる。つまり，17 世紀前半のかなり古い写本である。ベヴァリッジによれば［Beveridge 1906：81］，1836 年に H. Yule によって W. Erskine に寄贈された写本である。

量的な面からいうと，この写本は，フェルガーナ章を全く欠き，記事はカーブル章から始まる。そのカーブル章ですら，冒頭の短い部分を除き，最初から校訂本の 9 ページ分ほどが欠落している。質的な面でも，カーブル章，ヒンドゥスターン章共に乱丁や語句の脱落，それに写字の誤りが多く，ベヴァリッジもあまりその価値を認めなかった。

著しい乱丁を整理すると，この写本に含まれているのは，校訂本全 610 ページのうち，186, 194－269, 269－276, 340－342, 363－371, 373－381, 441－454, 478－520 ページに相当する部分である。

3） この訳本については後述参照。

4） これが，バーブル自筆本ではないことが，ベヴァリッジによってすでに推定されている［Beveridge 1905－2：753］。

総合的に見て，不完全な質の良くない写本である。しかし，ハイダラーバード本の語形式が混乱していても，この写本が正しい語形式を伝えている場合もある。その一例については，近著の記述［間野 2001：28］を参照願いたい。このため，参照できるのは小部分であるが，本写本をも校訂本作成のために利用した。

⑤ロンドン本2，British Library (India Office) 蔵，写本番号 I. O. ISL 2538 [Ethé 1980: no. 214.]。

校訂本作成の際には利用できなかったが，2002年になって調査できた写本である。もともとは『バーブル・ナーマ』の研究者 J. Leyden の書庫にあった写本で，そのために Bibliotheca Leydeniana 本とも呼ばれている。この写本を検討したベヴァリッジは［Beveridge 1906：84］，②のカルカッタ本の項で触れた Mysore の写本とこの写本が同一のものである可能性，あるいはこの写本がカルカッタ本の写し，つまり Mysore の写本のさらに質の悪い写しである可能性などを示唆した。ただし，いずれも推測であり，先の②のカルカッタ本と同様，この写本の来歴は不明である。従って，書写年代も不明である。ベヴァリッジは，この写本について詳細な記述をしなかった。そのため，この写本の内容をここにやや詳しく述べる。

量の点で校訂本と比較すると，この写本のフェルガーナ章は906年の途中までで途切れ[5]，校訂本にある907年，908年の部分はない。また，校訂本にあるカーブル章の910年，911年，912年，913年，914年の記事もない。本写本は，フェルガーナ章の906年の途中から，突然カーブル章925年の記事に移る。そしてこの年の途中で途切れ[6]，突如ヒンドゥスターン章932年の記事が始まる。つまり，校訂本にあるカーブル章の926年の記事もない。またヒンドゥスターン章932年の記事も途中で途切れ[7]，すぐ後に933年の記事が途中から始まる。しかしこの記事も途中で途切れ[8]，記事がそこですべて終わる。このように，欠落部の多い写本である。

質的な面について述べると，すでに触れたように，しばしば記事が途中で途切れ，突然，別の記事が始まる。また，97葉表10行目から99葉表6行目には，別の位置に置かれるべき約4ページ分の長い記事が混入されている[9]。223葉表6行目には，校訂本に見える約6

5）本写本の119葉裏8行目。

6）157葉裏8行目。

7）220葉表13行目。

8）234葉表4行目。

9）写本の97葉表の5行目から13行目までと98葉裏の12－13行の文字の上に，何ものかの手で文字を消すための線が引かれ，96葉裏と98葉裏の欄外にペルシア語でこれらの部分が誤りであることが記されている。しかし，実は97葉表の5行目から10行目までは誤りではなく，消去する必要はない。このように，何ものかによって誤りであることは指摘されているものの，その指摘の範囲は正確ではなかった。

行分[10]が脱落している。また，各語の語形式の面でも，フェルガーナ章の冒頭，校訂本3ページ12行目のFarghāna vilāyatıda（フェルガーナ地方で）という簡単な語が本写本ではFarghāna vilāyatıngda（汝のフェルガーナ地方で）となっているなど，単純な誤りも多い。このように，あまり良質な写本とは云えない。そのためベヴァリッジはこの写本を校訂本作成のためには無価値の写本と考えた［Beveridge 1908 : 97］。

しかし，ハイダラーバード本をはじめ，校訂に使用した諸写本で脱落している語をこの写本が伝えている場合もある。例えば校訂本の8ページ3行目にagarcha qaṣaba emäs edi（都市ではなかったが）とあるが，この写本の5葉裏2行目にはagarcha ulugh qaṣaba emäs edi（大きい都市ではなかったが）と見える[11]。この場合，この写本の方が，バーブルの原本により近いことは，アブドゥッ・ラヒームのペルシア語訳にもagarcha qaṣaba-yi kalānī nīstと見える［Thackston 1993 : 8］ことから推定できる。

このような例もあるため，本写本も，欠点は多いとはいえ，校訂本を補訂するため参照すべき写本と考える。

⑥マンチェスター本，John Rylands Library蔵，写本番号不明。

筆者が未だ調査したことのない写本の一つで，通常，Bibliotheca Lindesiana本と呼ばれている。ベヴァリッジによれば［Beveridge 1906 : 83］，1865年，Crawford伯爵がパリで購入した写本で，伯爵の蔵書目録［Kerney 1898］にも収録された。分量的には，ハイダラーバード本全382葉中の71葉裏まで，つまり校訂本610ページ中の106ページまでしか含まぬ不完全な写本である。このため，校訂作業にはおそらくあまり利用できないであろう。書写年代は不明である。ただ，一度写本を調査する必要はある。なお，現在この写本を所蔵するJohn Rylands Libraryの東洋語諸写本については，J. D. Pearsonの記述［Pearson, 1971 : 315－316］が参考になる。

⑦テヘラン本，Kitābkhāna-yi Salṭanatī蔵，写本番号2249［Ātābāy 1977 : 460－463］。

校訂本作成の際には利用できなかったが，1998年，筆者がそのゼロックスコピーを用いて調査し，概要をすでに学界に報告した［間野 1998 ; Mano 1999］貴重な写本である。詳しくはその報告を参照願いたい。

このテヘラン本は，バーブルの5つの著作，すなわち『ムバイイン』，『504のリズム』，『アルーズ・リサーラス』，『バーブル・ナーマ』，『ワーリディーヤ・リサーラス』を含む『バーブル著作集』とも呼ぶべき写本の一部を構成する。

この写本は全体で1,036ページ，『バーブル・ナーマ』はそのうちの457～1,010ページを占める。

---

10) 校訂本の491ページ20行目から492ページ5行目まで。

11) このulughの語は，間野 2001 : 21でも述べたように，校訂本作成の際に利用できなかった⑦テヘラン本にも見える。

『バーブル・ナーマ』の部分の筆写年代は，1589年以降，1613年以前と考えられ，その作成地はインドである。このように，この写本は筆写年代が古いという点でも重要である。

この『バーブル・ナーマ』を分量の面から校訂本と比較すると，この写本に存在するのは，フェルガーナ章の899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906年の記事，カーブル章では925年の記事のみ，そしてヒンドゥスターン章は932, 933年の記事である。つまり校訂本に存在する907, 908, 910, 911, 912, 913, 914, 926, 934, 935, 936年の記事を全く欠く。また，906, 925, 933年の記事も途中で途切れている。つまりこの写本は量的には大きな欠落部を持つ不完全な写本である。

しかし，質的な面から見ると，①のハイダラーバード本や③のエディンバラ本に脱落している語を伝えている場合[12]もあり，また文や単語もかなり正確に写されている。これらの点から見て，このテヘラン本はハイダラーバード本やエディンバラ本に匹敵する優秀な写本であり，校訂作業にも利用すべき写本と見なされる。

ただ，校訂本と比較すると，約1葉（2ページ）分とか[13]，十数行分が抜けていたり[14]，数語が脱落したり[15]，また数語が重複して書かれていたりする場合[16]もかなり見られる。ただしこれは，優良な写本と見るべきハイダラーバード本やエディンバラ本でも見られる欠陥で，特にこの写本の価値を損なうものではない。

この写本の特徴の第1は，チャガタイ語本文の行間にペルシア語の訳が付けられていることである。ただし，『バーブル・ナーマ』の行間のペルシア語訳は1589年にアクバルに呈上されたアブドゥッ・ラヒームのペルシア語訳本を参照し，ほとんどの場合，その訳文をそのまま借用したものである。

特徴の第2は，『ムバイイン』全体と『バーブル・ナーマ』の一部に，文中に現れるチャガタイ語の発音が欄外に小さい文字で注記されていることである[17]。また発音のみならず，語の意味も付せられている場合[18]も多い。本来はこの『バーブル著作集』に収められた全て

12）例えば，⑤のロンドン本2の項で触れたulughをこの写本（466ページ1行目）も伝えている。

13）例えば，573ページ末尾から574ページ冒頭との間に，校訂本の56ページ9行目から59ページ8行目までの文章が脱落している。

14）例えば，565ページ13行目に校訂本の52ページ12行目から53ページ3行目までの文章が脱落している。

15）例えば，554ページ13行目に校訂本の47ページ3行目の8語が脱落している。

16）例えば，556ページ3行目に6語が重複して書かれていることが，校訂本の47ページ16－17行目を見れば分かる。また，この重複して書かれた文章にも1語が脱落していることが分かる。

17）一例をあげると，『バーブル・ナーマ』の最初のページでは，AYYというチャガタイ語の発音が，欄外にba-madd ba-hamza wa ba-dū yā awwal kusūr wa thānī mawqūfとペルシア語で注記され，このチャガタイ語をayıと読むべきことが示されている。

18）例えば，532ページの欄外には，yüzlänip（顔を向けて）の発音を説明した後に，その意味はペルシア語でrūy dāda（顔を向けて）であるとする。

の作品の，全てのチャガタイ語についてその発音や意味を注記するつもりであったかと推定されるが，その作業があまりに煩瑣なので，途中でやめてしまったという感じである。この発音や意味の注記は，おそらくはチャガタイ語をよく知らぬ人々，より正確にはおそらくカージャール朝時代のイランの人々のために付けられたもので，チャガタイ語の研究も進んだ現時点からすれば，特に重要な意味を持たない。

現在，この写本と校訂本を一字一句対照して検討中であるが，925年までの記事について云えば，少なくとも899年の部分で2語，903年の部分で3語を校訂本に追加すべきであると考えている。このように，本写本によって校訂本を補訂できる部分は少数のはずである。しかし少数であっても補訂に利用できると云うことは，この写本が優良な写本であることを示す。近い将来に，検討の結果を発表し，それによって校訂本の補訂箇所を明示したいと考えている。

⑧サンクト・ペテルブルク本1，Sankt-Peterburgskij Filial Instituta Vostokovedenija Rossijskoj Akademii Nauk 蔵，写本番号 D 685［Dmitrieva 1965 : No. 76.］

校訂本作成の際には利用できなかったが，1999年に調査できた写本である。サンクト・ペテルブルクの外務省で近東諸語を担当していた George Jacob Kehr が，中央アジアで1126年 / 1713－14年に作られた[19]一写本をもとに，1737年，コピストに写させた写本で[20]，通常ケール本と呼ばれる。この写本は，1857年，ロシアのテュルク学者 N. Ilminski によってアラビア文字による活字本としてカザンで出版された［Ilminski 1857］。これが，カザン本ないしイルミンスキー本と呼ばれるテキストである。筆者が校訂本を作成した際には，この写本（サンクト・ペテルブルク本1）を利用できなかったため，代わりにイルミンスキーの活字本を利用した。

この活字本が，サンクト・ペテルブルク本1を正確に反映しているか否かについては，ロシアの言語学者 G. F. Blagova の優れた論文［Blagova 1961］があり，これについては，近著の中に詳しく紹介してある[21]。また同じ箇所には，この活字本についてのベヴァリッジによる誤解を含む批判[22]についても紹介してある。いずれも，それらを参照願いたい。筆者は，ブラゴーワの説に荷担して，イルミンスキーの活字本は，この写本をかなり忠実に反映したものと考えている。ただし，イルミンスキーの解釈が入っている部分もあり，校訂作業にはこの写本を参照すべきことは云うまでもない。

19）写本末尾の記載に依る。

20）詳しくは，Blagova 1996 を見よ。

21）間野 2001，第1部，第6章。

22）最大の誤解は，ベヴァリッジが，このイルミンスキー出版のテキストを，最初，『バーブル・ナーマ』の正確なテキストというより，チャガタイ語学習者のための教科書のごときものだと見なす，誤った先入観をいだいた点である。

この写本は，1999年の調査の結果，チャガタイ語本文の記載方法という形態的な観点から見て，極めて特異な写本であることが判明した。この写本で，チャガタイ語本文は短い文や語句に細かく細分化され，いわば文章がぶつ切れにされた形，つまり改行に改行を重ねた形で記されている。しかも，多くの場合，見開きのページの，右か左のどちらかのページにチャガタイ語がこのような形で書かれ，それに対応するもう1つのページにラテン語の訳が段落ごとに細分化されて書かれている。ただ，見開きの両方のページにチャガタイ語本文のみが書かれ，ラテン語訳が全く書かれていない場合も多い。特に535ページ以降はそうである。

以上のこの写本の特異性は，ケールがこの写本を『バーブル・ナーマ』のラテン語訳を作成するために作らせた可能性を示唆している[23]。つまりケールがラテン語への訳出の作業をしやすくするために，写字生に注文を出して，意図的にこのような特異な形で写させたものと推定される。ただ，ラテン語への訳出の作業は完了せず，途中で放棄されている。

このように，チャガタイ語本文の記載の形態という点で，この写本は他の諸写本とはまったく異なる特異な写本である。

質的な面について述べれば，この写本は本来バーブルの文章でなかった多くの文章を含むなど，重要な欠点を容易に指摘できる［間野 2001：31］。しかし，それらの部分をのぞけば，チャガタイ語の本文そのものは決して質の劣るものではなく，ブラゴーワも指摘しているように，校訂本のために利用すべき写本であることは疑いない。ただ，本写本のアラビア文字は，他の諸写本に比してもっとも乱雑で稚拙である。なお，この写本の質の問題については，詳しくは近著の記述［間野 2001：30－31］を参照願いたい。

また，この写本は量的にも校訂本の末尾までを含む。それ故に，量の点でも③から⑦までの諸写本より優れている。

ただ，この写本と，次に取り上げる⑨のサンクト・ペテルブルク本2は，①③④⑤⑦の諸写本[24]には見えない独自の記述を含んでおり，その性格については，なお詳しい検討が必要である。ここでは，『バーブル・ナーマ』冒頭部に見える以下の3つの問題点のみについて記しておきたい。

1　この写本の冒頭に，アッラー，ムハンマド，4人の正統カリフに対するバーブルの謝辞[25]が付けられている。この謝辞は，①③④⑤⑦の諸写本には見えない[26]。それ故，校

23）ベヴァリッジも同様の印象を持った［Beveridge 1908：78］。

24）まだ検討の機会のない②⑥は不明であるが，おそらくは①③④⑤⑦の諸写本と同様である。

25）謝辞の内容は，「至高の神のご配慮によって，かの被造物らの長たるお方のお仲立ちによって，4人の清浄なる友らのご仲介によって（tengri ta'ālā-nıng 'ināyatı bilän wä ḥaḍrat-i ān sarwar-i kā'ināt-nıng shafā'atı birlän wä chār yār-i bā-ṣafāları-nıng himmatı birlän）899年……私は……支配者となった」である。

26）まだ検討の機会のない②⑥がこの謝辞を含むか否かは不明であるが，おそらく①③④⑤⑦と同↗

訂本では，イルミンスキーの活字本に見えたこの謝辞を脚注に引用するにとどめた。しかし，再考するに，この謝辞は，次の⑨にも見え，またこれが文章の冒頭にあった方が，文章が整い，また落ち着くと思われるため，現在はこの謝辞を校訂本の本文に採用すべきであったと考えている。なお，最近ウズベキスタンでP. Shamsievとs. Mirzaevが1960年に出版していたウズベク文字による『バーブル・ナーマ』のテキストを筆者の校訂本を参照して全面的に改訂したウズベク文字による新版が出版された。この新版でも，この謝辞を本文に採用している［BN：34］。

2　バーブル12歳（満11歳）でのフェルガーナ君主位への即位の日付を，この写本のみが「(899年）ラマザーン月5日火曜日」と記す。校訂本には，諸写本に見えるところに従って，単に「(899年）ラマザーン月」と月名のみを記載してある。この写本に見える詳しい日付を校訂本に採用すべきか否かは難しい問題である[27]。しかし月名のみを記して日や曜日を記さないのはバーブルの『バーブル・ナーマ』の通例から見て不自然であるため，現在は本写本に見える「(899年）ラマザーン月5日火曜日」を校訂本に採用すべきであると考えている[28]。ウズベキスタンの新版でも，この日付を本文に採用している［BN：34］。

3　校訂本の，フェルガーナ地方の地理に関する「(フェルガーナ地方の）北には，以前には，アルマリグ，アルマトゥ，そして諸文献にオトラールAṬRARと記されているヤンギのような都市があったが，今ではモグールとウズベクによって破壊され，人の多く住むところは全く残っていない」という記述の内の，「諸文献にオトラールと記されているヤンギのような都市」が，この写本では「諸文献にタラールケントṬRARKNTと記されているヤンギのような都市」となっている。ここに見えるタラールケントṬRARKNTは次に述べる⑨のサンクト・ペテルブルク本2に見える語形式からみてタラーズケントṬRAZKNTの誤記と思われる。では，このタラーズケントをどう考えるか。バーブルの原典にそのようにあったものか，それとも後世にこのように書き直されたものか。この点については，説明の都合上，次のサンクト・ペテルブルグ本2の項で取り上げたい。

↘様，含まないと考えている。

27）アブル・ファズルの『アクバル・ナーマ』［AN：87］にも「ラマザーン月5日火曜日」と見える。『アクバル・ナーマ』の執筆時に著者アブル・ファズルが参照した『バーブル・ナーマ』の写本にそのように記されていた可能性が強い。ただ，サンクト・ペテルブルク本1（あるいはそのもとになった写本）の作成者が『アクバル・ナーマ』を参照して後にこの日付を追加した可能性も否定できないのは事実である。なお，濱田正美氏は，この日付がバーブルの父，ウマル・シャイフが事故で死亡した日の翌日に他ならず，それ故にこの日付はウマル・シャイフの死去の日付を知る者なら誰でも書き入れることが可能であったという興味深い指摘をしている［濱田 2003：146］。

28）Blagovaも同意見と考えられ，この部分を［säšänbä küni］rämäzan ajy［ny bešida］と復元している［Blagova 1994：48］。

とにかく，この写本は種々の点で興味深く，校訂作業に使用すべき写本である。ただ，この写本には明白な欠点が多いことも事実であり，総合的に見て，質的には，ハイダラーバード本，エディンバラ本，テヘラン本に比べて劣ることも確かであろう。

⑨サンクト・ペテルブルク本2，Sankt-Peterburgskij Filial Instituta Vostokovedenija Rossijskoj Akademii Nauk 蔵，写本番号 D 117［Dmitrieva 1965 : No. 78］。

校訂本作成の際には利用できなかったが，1999年に調査できた写本である。サンクト・ペテルブルク大学でアラビア語・ペルシア語を講じたセンコフスキー Josef-Julian Senkovskij[29] が，中央アジアのブハーラーで1121年 / 1709－10年に書写された一写本をもとに，1824年，コピストに写させた写本で，通常センコフスキー本と呼ばれる。18世紀の写本をもとに19世紀に作られた写本であり，紙やインクも近代のものを使用している。分量は，校訂本（全610ページ）の337ページまでの記述，つまり校訂本の約半分の記述を含むのみである。このように，書写年代が新しく，分量も少なくては，はじめから価値が低いとも云える。この写本は以下に述べるような4つの特徴を持つ。

1　チャガタイ語の本文中に，「フェルガーナの描写」「ミールザー・ウマル・シャイフの諸状況」など，記述の内容を示す小見出しが赤字で付けられている。このような小見出しは，他の諸写本には全く見られない。それ故，これらはバーブルの原文に本来は無かったものであり，後に付け加えられたものと考えられる。

2　写本の冒頭に，アッラーとムハンマドに対するかなり長い讃辞が見られる[30]。このような長文の讃辞は他の諸写本には見られない。おそらくこの讃辞は，イスラーム世界のおける書物の体例[31]に則った，後世の追加と考えてほぼ間違いないであろう。この讃辞の直後にはサンクト・ペテルブルク本1と同様に，アッラー，ムハンマド，4人の正統カリフに対するバーブルの謝辞が付けられている。この謝辞は⑧にも見えるため，すでに⑧の項で述べたように，現在は校訂本の本文に収録すべきであったと考えている。なおこの謝辞は，この写本がサンクト・ペテルブルク本1と同系統の写本であることを示すものである。

3　12歳でのフェルガーナ君主位への即位の日付については，「ラマザーン月5日土曜

29）センコフスキーについては，香山 1996 : 5 に記述がある。

30）この讃辞を日本語訳すると「世界の支配者にして，被造物の君主たるお方に限りなき讃えあれ。かのお方は，大地を人々に遺産として継承するようお命じになったお方。大地の上に種々の民族・部族をお造りになったお方。その諸部族の上に，秩序を保ち正義を打ち立てる義務をはたすべく，また，支配し保護する必要性を満たすべく，スルターンや王らの階層をお置きになったお方である。また，選ばれたる使徒に限りなき無数の讃えあれ。かのお方は，世の人々に宗教と聖法を与えられ，人々が両宮殿（＝この世とあの世）で繁栄し幸せに過ごすに相応しくさせ給うたお方である。アーメン」となる。

31）イスラーム世界の書物は，神アッラー，預言者ムハンマドとその一族，ムハンマドの教友達に対する讃辞や謝辞で始められるのが普通である。

日」と記すが，この中の「土曜日（shanba)」は「火曜日（se shanba)」のseを落とした単なる誤記である。前述のごとく，この日付は，誤記を正して，校訂本に採用すべきであったと現在は考えている。なお，この部分も，この写本がサンクト・ペテルブルク本1と同系統の写本であることを示している。

4　フェルガーナ地方の地理に関する校訂本の「諸文献にオトラールと記されているヤンギのような都市」は，この写本では「諸文献にタラーズケントṬRAZKNT と記されているヤンギのような都市」となっている。サンクト・ペテルブルク本1もほぼ同様であることはすでに述べた。

このオトラール[32]とタラーズケント（正しくは，タラーズ[33]）のどちらを校訂本に採用すべきかはかなり難しい問題[34]である。

バーブルが記したヤンギを，明代の中国の文献に「養夷」として知られた町と見なすと[35]，地理的によく合うのはオトラールよりもタラーズの方である。それに加えて，『ターリーヒ・ラシーディー』に「タラーズ，すなわちヤンギの別名」という明快な記述があり［TR: 47a]，『ハフト・イクリーム』もタラーズの項［HI: 1662］でこの町がヤンギとも呼ばれたと記す。これらの点から考えると，バーブルが『バーブル・ナーマ』を執筆した16世紀にタラーズがヤンギと呼ばれていたことは確実である。ただ，この事実にも関わらず，バーブルがオトラール＝ヤンギと誤って考えていた可能性[36]やオトラールもまた当時ヤンギと呼ば

32）①ハイダラーバード本，③エディンバラ本，⑦テヘラン本，およびアブドゥッ・ラヒームのペルシア語訳本はすべてオトラールである。④ロンドン本1はこの部分を含むページを欠く。

33）本文中で後述するように，筆者は，現在，校訂本に採用した「オトラールAṬRAR」を「タラーズṬRAZ」に改める方向に傾いている。すなわち，①，③，⑦，およびアブドゥッ・ラヒームのペルシア語訳本等に見える語形式（AṬRAR）の最初のAを後世の追加と考え，末尾のRをZ，すなわちZの点を脱落した単純な誤りと見るのである。つまり，この語は本来4つのアラビア文字で書かれていたが，写字生，あるいは写本の読者が4文字のṬRARでは読めないので，この語の直前にあるべきAが脱落したものと解釈し，Aを補って，AṬRAR（オトラール）と直してしまったと考えるのである。もっとも，ṬRARでは読めなかったのは当然で，本来の末尾の文字はRではなく，Zであったはずである。タラーズケント（ṬRAZKNT）という語形式について云えば，諸史料にタラーズの形はよく現れるが，タラーズケントという形はほとんど知られていない。おそらく，町を意味する3文字からなる接尾辞「ケント（KNT)」は後世の追加と考えられる。そして，この接尾辞を除いた4文字のタラーズ（ṬRAZ）が本来の語形式であったと考えられるのである。

34）この問題について，堀川徹氏が1998年の京都大学羽田記念館での講演「シル河流域の都城址」の中で触れたことがあるが，難しい問題であるため，なお氏によっては論文化されていない。

35）ヤンギはテュルク語で「新しい」の意味である。町の名としては単に新しい町の意味であるから，ヤンギと記されていても中国文献に「養夷」と記録された町と同じ町を指すとは限らない。しかし，この場合のヤンギは，おそらく「養夷」と同一の町を指すと見て間違いないであろう。

36）例えば，バーブルはシル川が砂漠に吸い込まれて消失する尻なし川だと勘違いしていた。『バーブル・ナーマ』の記述［間野 1995: 4］を見よ。バーブルのこの方面の知識が混乱していた可能性も否定できないのである。

れていた可能性も否定することはできない。

これらの可能性を考えて，筆者は近著の中［間野 2001：34］で，「現在のところ，年代の古い諸写本にすべてそのように記されているところから，バーブルの原典に記されていたのは，やはりオトラールではなかったかと考えている」と記した。

しかし，最近（2002年）参照できた『バーブル・ナーマ』のMīrzā Pāyanda Ḥasan GhaznawīとMuḥammad Qulī Moghūl Ḥiṣārīによるペルシア語訳[37]の一写本の該当部分[38]を見ると，そこには問題の箇所が“Yangī ki bi-Ṭarāz mashhūr ast”，つまり「タラーズとして知られているヤンギ」と訳されていることが判明した。このような訳の存在は，16世紀に作られたこのペルシア語訳が底本とした16世紀のチャガタイ語写本，すなわちかなり古いチャガタイ語写本には「諸文献にタラーズと記されているヤンギのような都市」と記されていた可能性を高くするのである。現在我々の参照できるチャガタイ語の諸写本は，いずれも書写年代がこの16世紀の古いチャガタイ語写本より新しいものばかり[39]と考えられる。そうであれば，バーブルの原本にあった語形式がこの16世紀のチャガタイ語写本に，新しい諸写本よりも，より忠実に伝えられていた可能性が強い。また，⑤ロンドン本2には，該当する部分が墨で消されているが，墨の下には，明瞭とは云えないものの，ṬRAZというアラビア文字が読みとれる。つまり，⑤によっても，バーブルがオトラールではなくタラーズと書いていた可能性が強いと云えるのである。

このように考えた結果，筆者は，現在，校訂本のオトラールをタラーズに改める方向へと傾いている。つまり，サンクト・ペテルブルクの2写本が，バーブルの正しい語形式をタラーズケントという変形した形で伝えているのではないかと考えるのである。ただ，この問題は，Mīrzā Pāyanda Ḥasan Ghaznawīらのペルシア語訳につき，インディア・オフィス以外の写本（後述）をも調査しなければ正確な答えを出すことは出来ない。そのためいまはここに，この見通しを記すにとどめたい。なお，ウズベキスタンの新版はオトラールとしている［BN：34］。

このサンクト・ペテルブルク本2は，このように種々の問題を提起する写本ではあるが，全体的には近代になって写され，後世の付加部分をも含んだ写本であり，諸写本の中では価値の低い写本であることは否定できないであろう。

37）有名なアブドゥッ・ラヒーム・ハーニ・ハーナーンのペルシア語訳に先立って完成された別の訳本。994/1586年に着手された。なお，このペルシア語訳については後述。

38）British Library（India Office）所蔵の写本：I. O. Isl 913, 1b.

39）もっとも古い可能性のあるのは1589年以降，1613年以前に作成されたと考えられるテヘラン本である。しかしこの写本もパーヤンダ・ハサン・ガズナヴィーらのペルシア語訳（1586年に着手）の底本とされたチャガタイ語写本より新しい写本と考えられる。

⑩サンクト・ペテルブルク本3，Sankt-Peterburgskij Universitet 蔵，写本番号不明。

筆者が未だ調査したことのない写本の一つで，1871年，サンクト・ペテルブルク大学が一個人から購入した。ベヴァリッジによって⑧のサンクト・ペテルブルク本1の単なるコピーと推定されている写本である［Beveridge 1900 : 465 ; Beveridge 1906 : 85］。もしこの推定が正しいとすると，ほとんど価値のない写本である。しかし，ベヴァリッジの推定の可否を確かめるためにも，調査の必要がある写本の一つである。

Ⅱ　ペルシア語訳写本

別稿ですでに述べたように［間野 2001 : 41］，ムガル朝時代に作成された『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳本もチャガタイ語原本の復元作業のためにきわめて有用である。

『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳とされる作品には3種類がある。最初の著作はバーブルの在世中，あるいはその死後数年以内に作成され，ついで，他の2種類が，バーブルの孫でムガル朝の第3代の君主であるアクバルの時代に作成された。以下，これらの著作とその写本について簡単に紹介する[40]。

1　Shaykh Zayn al-Dīn Khwāfī Wafā'ī のペルシア語訳本

バーブル（937/1530年没）と同時代人であるShaykh Zayn al-Dīn Khwāfī Wafā'ī（940/1533－34年没）の作品で，『タバカーティ・バーブリー』の名でも知られている。シャイフ・ザインはペルシア語の名文家として知られ，カーヌワーハの戦いを前にしてのバーブルの禁酒令やこの戦いの勝利を各地に伝える捷報の起草にも当たった人物である。Rieu，Storey，Blochet らはこの作品を『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳の一種と考えた［Rieu 1883 : 926b ; Storey 1927 : 532－533 ; Blochet 1934 : 113］。ただし，より正確には『バーブル・ナーマ』の逐語訳ではない。シャイフ・ザインが『バーブル・ナーマ』の記述に完全に依拠しつつ，バーブルのインドにおける活動の一部（932年の部分と933年の部分の途中まで[41]）を修辞に富む華麗なペルシア語を用いて叙述した作品であり，『バーブル・ナーマ』に見えないシャイフ・ザインの見聞に基づく独自の情報をも含む。このため，これを翻訳ではなく，シャイフ・ザインの独立した作品と見なすべきだとする見解もある[42]。

40）『バーブル・ナーマ』のペルシア語訳については，Beveridge 1906 : 89 ; Storey 1927 : 532－534 などの記述が参考になる。

41）932年の部分には，パーニーパトの戦いと勝利，インドの地誌に関する記述を含む。933年の部分はカーヌワーハの戦いの直前までの記述で終わる。全体は，校訂本の403ページから500ページまでの記事に相当する。

42）例えば，この書の英訳であるTBの序文を見よ。

この見解にも一理あるが，『バーブル・ナーマ』の記述にほぼ全面的に依拠していることも事実であり，一種の翻訳と考えてよいであろう。

この作品の一つの特徴は，その箇所は限られているが，要所要所でバーブルのチャガタイ語の原文が，ペルシア語に翻訳されずに，そのまま引用されている点である。例えば，バーブルがどのようなテーマであれ，何でも詩にしてみるという自らの日頃の習慣を反省したことを述べた箇所については，この書のパリの国立図書館本では，およそ2葉に亘って[43]チャガタイ語の原文が続いている。これらのチャガタイ語の部分は，シャイフ・ザインが利用した古い優れたチャガタイ語写本からの引用のはずである。それ故，この作品は校訂本の参考資料の一つとしても利用できる。

この書の写本としては，次の4本が知られている。筆者は，この内の②を利用した。

①ラーンプル本，Rampur Raza Library 蔵，写本番号 258[44]。

未見。Sayed Hasan Askari が英訳［TB］に使用した写本で，アスカリーによれば著者の自筆本から写された写本であるという。ただし，誤字，脱落なども多いというから，あまり優れた写本とは思われない。

②パリ本, Bibliothèque nationale 蔵, 写本番号 Ancien fonds persan 107 [Blochet 1934 : 113]。

この訳は，ペルシア語とアラビア語による5つの文章を集めた188葉よりなる写本の一部（ff. 89a－185a）として収録されている。独立した写本ではない。この『バーブル・ナーマ』の訳の部分も，冒頭部と終結部を欠く[45]不完全な写本である。

③ロンドン本1，British Library 蔵，写本番号 Or. 1999［Rieu 1883 : 926b]。

1989年に調査したが，なおコピーを取得していない写本。書写年代は998/1590年。書写年代から考えて，比較的古い写本と思われるが，Rieu によって，次の④には見える22葉分の脱落があることが指摘されている。

④ロンドン本2，British Library 蔵，写本番号 Add. 26, 202［Rieu 1879 : 246a]。

1989年に調査したが，なおコピーを取得していない写本。書写年代は Rieu が引用する Erskine によれば17世紀という。

43）92a の末尾から93a の半ばまで。

44）Rampur Raza Library 1996 : 613 に *Tārīkh-i Bāburī* という書名で掲載されている。なおこのカタログは真下裕之氏の好意で入手できた。記して謝意を表したい。

45）この著作は，校訂本の403ページから500ページまでに相当する記事を含むはずであるが，この写本では，冒頭の403ページから404ページ11行目までと，終結部の472ページから500ページまでの部分を欠く。

2 Mīrzā Pāyanda Ḥasan Ghaznawī と Muḥammad Qulī Moghūl Ḥiṣārī のペルシア語訳本

994/1585－86年，ムガル朝の有力者であったBihrūz Khānの要望によって，Mīrzā Pāyanda Ḥasan Ghaznawīが『バーブル・ナーマ』のペルシア語への翻訳に着手し，冒頭から906年の途中まで[46]を訳出した。さらにその後，この訳の途切れた箇所からMuḥammad Qulī Moghūl Ḥiṣārīが引き継ぎ935年の途中まで[47]を訳出したものである。ただし，先に1で紹介したShaykh Zaynの著作ですでに扱われているヒンドゥスターン章932年から933年の部分をはじめ，『バーブル・ナーマ』に記事があっても本訳書で訳を完全に省略した部分[48]や訳を簡略にしたかと思われる部分[49]もある。その意味でこの訳は『バーブル・ナーマ』のペルシア語による完全訳ではなく，その抄訳とでも呼ぶべき作品である。そのため，この著作よりも後に，原文に忠実な完全訳として完成された'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānānのペルシア語訳がこの訳よりも高く評価され，やがてこの訳の存在は忘れられていくのである。

ただ，この訳は，その作成年代から考えて，今日までに散逸した古いチャガタイ語の写本を用いて訳出されたはずであり，そのため原本の語形式を，後世のチャガタイ語諸写本よりも正しく伝えている可能性がある。その一例として，先にオトラールとタラーズの例を挙げた。さらに別の例を挙げると，906年にバーブルがサマルカンドに籠城した際の記述で，校訂本[50]では"mening anam igächi singälim qurghanda turup"（私の母や姉妹が城内に留まっていた）とある部分が，この訳本[51]では"mādar wa mādar-i kalān wa hamshīrhā-yi man dar qal'a māndand"（私の母や祖母や姉妹が城内に留まっていた）と訳されている。つまり，チャガタイ語原本に，ペルシア語でmādar-i kalānと訳された「祖母ulugh anam」という語があった可能性があり，もしそうであれば，校訂本にこの語を追加する必要があるのである。このように，この訳も校訂作業のために利用できるのである。

---

46) 校訂本の134ページ1行目まで。

47) 校訂本の604ページ12行目まで。

48) 例えば，925年の記事も途中まで（校訂本の380ページまで）しか訳されておらず，926年の記事も訳されていない。

49) 例えば，校訂本119ページ16行－18行に見える「ムハンマド・マズィード・タルハンをはじめとするサマルカンドのベグたちは，部下や家族・郎党と共に私たちと一緒に移動した。私たちがチャガーニーヤーンのチルトゥ牧地に下馬した時，ムハンマド・マズィード・タルハンをはじめとするサマルカンドのベグたちは別れて去り，ホスロー・シャーに臣従した」という文章が，この訳本（64葉裏7行－8行）では「ムハンマド・マズィード・タルハンとサマルカンドのベグたちは，去って，ホスロー・シャーのもとに来た」と訳出されている。もっとも，訳に使用したチャガタイ語写本にすでに欠落があった可能性もある。

50) 133ページ19行－134ページ1行目。

51) British Library（India Office）MS I. O. Islamic 913, 72葉裏11－12行目。

なお，この訳の写本としては，現在，以下の4種類が知られている。ただし，筆者がコピーを所蔵するのは②の1本のみである。

①ロンドン本1，British Library 蔵，写本番号 Add. 6588［Rieu 1881 : 799a］。

書写年代は1203/1789年。1989年に調査した際には，あまり質のよくない写本であるとの印象を受けた。しかし，再調査の必要がある。

②ロンドン本2，British Library（India Office）蔵，写本番号 I. O. Islamic 913［Ethé 1980 : no. 215］。

今回参照した写本。書写年代は不明。脱落や断絶も多い不完全な写本。1葉表の書き込みや蔵書印から，この写本が1804年5月30日，Liut. Col. W. Kirkpatrick によって East India Company の図書館に寄贈されたものであることが分かる。また，写本末に添付された借用表の記述から，この写本が，1906年7月23日から8月3日まで，1910年4月18日から1913年8月18日まで，1915年5月20日から1916年6月30日までの3度に亘って，ベヴァリッジによって借用されていたことが分かる。ベヴァリッジは，この写本の1葉目の直前のページに，1916年6月に書かれたこの写本に関する1ページ大の Supplementary note of I. O. 215 を付し，この写本の欠落部などについて説明し，この写本が不完全なものであることを指摘している。

③ケンブリッジ本，Cambridge University 図書館蔵，カタログ番号1351［Browne 1922］。

未見。書写年代は不明。1788年，King's College に寄贈された写本［Storey 1927 : 533］。

④オックスフォード本，Bodoleian Library, Oxford University 蔵，カタログ番号179［Sachau 1889］。

未見。近代の写本［Storey 1927 : 533］。

3　'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān のペルシア語訳

'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān が1589年にアクバルに献呈したペルシア語訳である。Wāqi'āt-i Bāburī という名で知られる有名なこの訳本については，あらためて説明する必要もないであろう。古くは Erskine［Leyden 1826 : lx］が，そして最近では Thackston が述べているように［Thackston 1993 : xii-xv］，この訳本はチャガタイ語原典にきわめて忠実に訳出されている。また，分量的にも，校訂本の記述のほとんど全てを含む。このため，ムガル朝時代から優れた訳本と認められ，先の Mīrzā Pāyanda Ḥasan Ghaznawī らのペルシア語訳本に完全に取って代わった。筆者もこのペルシア語訳を校訂本の作成のために利用したが，きわめて有用であった。

よく読まれた訳で，写本も世界の各地に多数存在する[52]。もっとも有名な写本は，多数の

52）Rieu のカタログによれば，British Library だけでも12種類の写本を所蔵する。

美麗な細密画を含む次の2本である[53]。

①ロンドン本1，British Library 蔵，写本番号 Or. 3714.

②ニュー・デリー本，National Museum 蔵，写本番号 50. 326.

また，筆者は次の写本を①②と共に手元で参照している。

③パリ本，Bibliothèque nationale 蔵，写本番号 Suppl. persan 265.

このペルシア語訳のテキストはすでに Shīrāzī 1891，Thackston 1993 の2種類の活字本として出版されている。このうち，一つのテキストを翻刻したのみの Shīrāzī の書はもはや古く，ロンドンの2種の写本[54]を参照して作成された Thackston の書が利用しやすい。

Ⅲ 結びに代えて

まず，『バーブル・ナーマ』のチャガタイ語諸写本についての情報を要約すると以下のごとくである。

①ハイダラーバード本

量的に現存する諸写本の中で最大で，質的にも優れた写本。書写年代は推定で17世紀の前半。校訂本の底本として利用した優秀な写本である。

②カルカッタ本

未見。ベヴァリッジによれば，質が悪く，校訂本作成のためには無価値の写本という。書写年代は不明。一度調査する必要がある。

③エディンバラ本

量的には①より劣るが，いくつかの特色を備え，質的にも優れた写本。書写年代は推定で17世紀初頭。校訂本作成に利用した。

④ロンドン本1（大英図書館蔵）

乱丁が著しい上に，フェルガーナ章を全く欠くなど，量的には①③に劣る。ただし，書写年代は1039/1629－30年。17世紀前半の古い写本で，正しい語形式を伝えている場合も稀にあり，利用価値が全くないわけではない。校訂本作成に利用した。

⑤ロンドン本2（インディア・オフィス蔵）

量的には欠落部の多い写本で，質的にも優れた写本とは云えない。書写年代は不明。ベヴァリッジは，質が悪く，校訂本作成のためには無価値と考えた。ただし，正しい語形式を伝えている場合もあり，利用価値が全くないわけではない。校訂本の補訂に利用できる。

53） これらの写本の細密画は Suleiman 1969；Randhawa 1983 として出版されている。

54） British Library MSS, Or. 3714；Add. 26200.

⑥マンチェスター本

未見。量的には校訂本の6分の1程度しか含まない不完全な写本。書写年代は不明。ベヴァリッジによれば，質が悪く，校訂本作成のためには無価値の写本という。一度調査する必要がある。

⑦テヘラン本

書写年代は推定で1589年から1613年の間。現存する諸写本のなかでもっとも古い写本と推定される。量的な面では欠落部がきわめて多い。しかし質的には優れた写本である。現在，校訂本の補正のために参照中である。

⑧サンクト・ペテルブルク本1（ケール本）

書写年代は1737年と新しい。イルミンスキーが1857年に活字本として出版。チャガタイ語本文の記載の形態が諸写本とは異なる。質的な面で重要な欠点もあるが，量的には③④⑤⑦の諸写本より優れる。また①③④⑤⑦の諸写本には見えない独自の記述をも含む。校訂本の補訂に利用できる。

⑨サンクト・ペテルブルク本2（センコフスキー本）

書写年代は1824年ともっとも新しい。質的な面では後世の追加を含み，量的な面でも校訂本の半分程度しか含まぬ不十分な写本。⑧と同系統の写本で，独自の記述を含む。その意味で，校訂本の補訂に参照すべき写本。

⑩サンクト・ペテルブルク本3（サンクト・ペテルブルク大学蔵）

未見。書写年代は不明。ベヴァリッジによって⑧のコピーと推定されている。この推定が正しいとすると，近代の写本で，ほとんど価値はない。ただし，一度調査する必要がある。

次に，3種のペルシア語訳本については次のごとく要約できる。

まず，Shaykh Zayn の書は，原典のチャガタイ語をそのまま引用している部分を特に校訂作業のために利用できる。

Mīrzā Pāyanda Ḥasan Ghaznawī らの訳は，古いチャガタイ語写本からの翻訳であるため，原典の語形式を正しく伝えている場合がある。そのため，校訂作業に利用できる。

また，'Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān のペルシア語訳は原典にきわめて忠実に訳出されている。このため，先の校訂本作成の際にもこの訳を全面的に利用した。

なお，アメリカの R. Dankoff が筆者の校訂本についての書評の中[55]で指摘したように，『バーブル・ナーマ』の校訂作業には，Sanglākh『石ころ道』と呼ばれるチャガタイ語＝ペルシア語辞典[56]も利用できる。この Sanglākh は，ペルシア語によるチャガタイ・テュルコ

55）R. Dankoff, *Journal of American Oriental Society*, 117–4, 1997, p. 745.

56）この文献は，E. J. W. Gibb Memorial Trust 所蔵の写本が，Clauson 1960 として複製出版されている。ほかにも英国に2写本（British Library Or. 2892 ; Bodoleian Library, No. 176），イランに4写本［Tehran University Central Library No. 4919 ; Milli Library No. 1141 ; Majlis Li-↗

語のための一種の手引き書であり，18世紀半ば，アフシャール朝治下のイランでMirzā Mahdī Khānによって執筆された。筆者は校訂本を作成する際にこの文献を利用しなかった。しかしSanglākhには確かに『バーブル・ナーマ』からの引用文がかなり含まれる。そのため，この引用文をも校訂作業に利用すべきであった。

今後は，以上の知見をも活用して，先に出版した校訂本の補訂作業を地道に進め，バーブルの原本に少しずつでも近づいていきたいと考えている。

参考文献

AN: Maulawī 'Abd-ur-Rahīm (ed.), *The Akbarnamah by Abul Fazl i Mubārak i Allāmī*, Edited for the Asiatic Society of Bengal, Vol. 1, Calcutta, 1877.

BN: Bobur nomidagi khalkaro jamgarma (ed.), *Zahiriddin Muhammad Bobur, Boburnoma*, Toshkent, 2002.

HI: Amīn Aḥmad Rāzī, Tazhkirat-i Haft Iqlīm, jild 3, ed. Sayyid Muḥammad Riḍā Ṭāhirī, Tehrān, 1999.

TB: *Zain Khan's Tabaqat-i Baburi*, trnsl. S. Hasan Askari & annotation B. P. Ambastha, Delhi, 1982.

TR: Muḥammad Ḥaydar Dughlāt, *Tārīkh-i Rashīdī*, MS British Library, Or. 157.

Ātābāy, B. (1977) *Fihrist-i tārīkh-safar nāma-siyāḥat nāma-rūz nāma wa jughrāfiyā-yi Kitābkhāna-yi Salṭanatī*, Tehrān.

Beveridge, Annette S. (1900) Notes on the MSS. of the Turkī Text of Bābar's Memoirs, *Journal of the Royal Asiatic Society* (*JRAS*), 1900, 439-480.

Beveridge, A. S. (1905-1) *The Bábar-náma. Being the Autobiography of the Emperor Bábar, the Founder of the Moghul Dynasty in India, written in Chaghatáy Turkish; now reproduced in Facsimile from a Manuscript belonging to the late Sir Sálár Jang of Haydarábád, and edited with a Preface and Indexes*, Leiden-London.

Beveridge, A. S. (1905-2) The Haydarābād Codex of the Bābar-nāma or Wāqi'āt-i-bābarī of Ẓahīru-d-dīn Muḥammad Bābar, Barlās Turk," *JRAS*, 1905, 741-762.

Beveridge, A. S. (1906) The Haydarābād Codex of the Bābar-nāma or Wāqi'āt-i-bābarī of Ẓahīru-d-dīn Muḥammad Bābar, Barlās Turk (Concluded from p. 762, Oct. 1905),

brary No. 860; Razawi Library No. 2-36] の存在が知られ，これらの写本を利用した校訂本の作成が望まれる。また，『サングラーフ』に見えるチャガタイ語の単語をアラビア文字のアルファベット順に配列し，同書中のペルシア語による説明を採録した辞典としてKhiyāwī 1374がある。ただしこの辞典にはチャガタイ語の文例は全く採録されていない。なおこの辞典は近藤信彰氏の御好意により参照することができた。記して謝意を表したい。

JRAS, 1906, 79 – 93.

Beveridge, A. S. (1907) Further Notes on the Bābar-nāma MSS: The Elphinstone Codex, *JRAS*, 1907, 131 – 144.

Beveridge, A. S. (1908) The Bābar-nāma. The Material Now Available for a Definite Text of the Book, *JRAS*, 1908, 73 – 98.

Beveridge, A. S. (1922) *The Bābur-nāma in English* (*Memoirs of Babur*), 2 vols., London, 1922; repr. in 1 vol., London, 1969.

Blagova, Galina Fedorovna (1961) K voprosu o podlinnosti teksta《Babur-name》po Kerovskomu spisku, *Kratkie soobshchenija Instituta Narodov Azii*, 44, 89 – 105.

Blagova, G. F. (1994)《Babur-name》Jazyk, pragmatika teksta, stil', Moskva.

Blagova, G. F. (1996) K istorii Kerova spiska "Babur-name," *Vostok*, 1996, No. 3, 109 – 114.

Blochet (1934), Bibliothèque nationale, *Catalogue des manuscrits persans par E. Blochet*, Tome 4, Paris.

Browne, E. G. (1992) *A supplementary hand-list of the Muḥammadan manuscripts ... in the libraries of the University and Colleges of Cambridge*, Cambridge.

Clauson, Sir Gerard (1960) *Sanglax. A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān. Facsimile Text with an Introduction and Indices*, "E. J. Gibb Memorial" Series, New Series, XX, London.

Dmitrieva, L. V., A. M. Muginov, S. N. Muratov (1965), *Opisanie tjurkskikh rukopisej Instituta Narodov Azii*, I, Moskva.

Ethé, H. (1980) *Catalogue of Persian Manuscripts in the India Office Library*, London, repr. of 1903 ed., London.

濱田正美 (2003)（書評）間野英二著『バーブル・ナーマの研究　IV　研究篇　バーブルとその時代』『東洋史研究』61（4）, 145 – 154.

Ilminski, N. (1857) *Bābur-nameh diagataice ad fidem codicis petropolitani*, Cazani.

香山陽坪 (1996) ロシア帝政時代の中央アジア研究（補遺）『東海史学』30, 130 – 123.

Kerney, M. (1898) *Bibliotheca Lindesiana. Handlist of Oriental Manuscripts, Arabic, Persian, Turkish*, Aberdeen（私家版）.

Khiyāwī, R. (1374) *Sanglākh. Farhang-i Turkī ba-Fārsī az sada-yi dawāzdahum-i hijrī*, Tehrān.

Leyden, J. & W. Erskine (1826) *Memoirs of Zehir-ed-Din Muhammed Baber*, London.

間野英二 (1995)『バーブル・ナーマの研究　I　校訂本』松香堂.

間野英二 (1998) テヘラン・サルタナティー図書館所蔵の『バーブル著作集』について『東洋史研究』57（1）, 176 – 205（間野 2001 に再録）.

Mano, E. (1999) The Collected Works of Bābur preserved at the Salṭanatī Library in Tehran, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* (*The Oriental Library*), No. 57, 175 – 200.

間野英二（2001）『バーブル・ナーマの研究　IV　バーブルとその時代』松香堂.

Pearson, J. D. (1971) *Oriental Manuscripts in Europe and North America. A Survey*, Inter Documentation Company AG, Switzerland.

Rampur Raza Library (1996) *Catalogue of Persian Manuscripts*, Vol. 1, Rampur.

Randhawa, M. S. (1983) *Paintings of the Bābur Nāmā*, New Delhi.

Rieu, Ch. (1881), *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Vol. II, London.

Rieu, Ch. (1883), *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Vol. III, London.

Rieu, Ch. (1888), *Catalogue of the Turkish Manuscripts in the British Museum*, London.

Sachau, E. & H. Ethé (1889) *Catalogue of the Persian manuscripts in the Bodleian Library*, Oxford.

Shīrāzī, Mīrzā Muḥammad (1891) *Bābur-nāma mawsūm ba-Tūzuk-i Bāburī u Futūḥāt-i Bāburī*, Bombay.

Storey, Charles Ambrose (1927) *Persian Literature. A Bio-bibliographical Survey*, I, London.

Suleiman, Hamid (1969) *Miniatures of Babur-Nama*, Samarkand.

Thackston, Wheeler M. Jr. (1993) *Zahiruddin Muhammad Babur Mirza, Bâburnâma*, Chaghatay Turkish Text with Abdul-Rahim Khankhanan's Persian Translation, Turkish Transcription, Persian Edition and English Translation, 3 Vols., Vol. 1, Cambridge, Mass.

（京都大学）